

技術家ではない、亦モルフオルギッシュに物を見るのではない。とはいへ具體的な對象物にぶつかつた場合に、彼が科學者である限りに於いて、こゝに示された結果はまなぶべき點が多いと信ずる。(四六倍版本文八七頁、圖版四五葉、英文概要九頁、桑名文星堂發行、定價九圓)〔藤岡謙二郎〕

○雪野寺址發掘調査報告

柏倉亮 吉著

滋賀縣史蹟調査委員として同地方の歴史的研究に努力せられた柏倉氏が、日本古文化研究所の事業の一つとして調査せられた雪野寺址の發掘報告書である。

雪野寺址は近江國蒲生郡苗村大字川守に屬し、蒲生野のたゞ中にそゞり立つ雪野山の山裾に營まれてゐる。發掘によつて規模の明らかになつた遺構は、一邊四十五尺五寸の方形基壇の上に立つ方二十二尺の塔址のみであるが、古瓦或は塑像の埋没によつて推定せられる講堂址・金堂址・南門址等を考慮するならば、或は法起寺式の伽藍配置が想定せられるのではないかといふ。雪野寺址を特に重要著名ならしめた大小の塑像類は、塔址及び推定講堂址より發見せられたものであつて、本書の記載の大半はその解説に當てられてゐるが、後論に於いて著者はこれが配置に説き及んで、塔址に於けるものはかの法隆寺塔本四面具の如くに佛傳乃至本生譚の一部を具現せしものかと考へ得べく、講堂址のそれは等身の菩薩像に配するに菩薩・神王・童子等を以てし、例へば東大寺

法華堂に於けるが如き一群の尊像を構成してゐたものであらうと考へられた。

雪野寺址出土の古瓦には丸瓦に三種、平瓦に四種ばかりの種類がある。著者はこれ等を相互に組合はせて考察した後、その年代をすべて奈良前期に比定せられたが、その年代觀が後論に於ける塑像を天平期に比定せられたことと相俟つて、造塔造佛の關聯から雪野寺の造營年代を極限するの結果を導くとするならば、それには尙ほ今一段の論證が必要であるかに思はれる。

出土の遺物には他に金銅風鐸・土器・鐵釘等がある。風鐸はもとより往時塔の軒先を飾つたそのものと見られるが、形式に特色あつて重要な資料といふべきものである。

安吉山雪野寺に關してはその造營の和銅年間のことと傳ふる一個の傳説があり、またその安吉山の山號は和名抄に見ゆる蒲生郡安吉郷との關聯をしのばしめる。それらの傳へや今日雪野山背後の山腹に残る横穴古墳の數基に思を致して、こゝに培はれたこの地の豪族の大きいなる資力・文化を想起すると共に、それに對する中央勢力の波及を考察するならば、以て本寺造立の社會的意義に觸れ得るのではあるまいかと、流麗なる筆に要を盡くして本書の記載は終つてゐるが、この貴重なる遺跡に對しては更に徹底的なる調査を加へ、伽藍配置や塑像群その他の究明に十分なる研究を遂行する事の望ましさを思はざるを得ない。(四六倍版本文六六頁、圖版三八葉、日本古文化研究所發行 頒價參圓貳拾錢)

〔小林〕